

○近自然型ブロックを備えた直立型護岸

現在の概設直立型護岸では、生物の生育環境は平らな壁面だけであるが、護岸全面に生物・水・空気が内部に出入りできる近自然型ブロックを設置することにより、甲殻類など水生生物の、生育環境の創出に配慮する。

構造としては、近自然型ブロックの前面を平滑な表面ではなく凹凸を付けることにより日陰ができる形状とし、奥行き2m程度のブロック内部には中詰としてしゅんせつ土等を入れ、生物、水、空気が出入りできる構造とする。

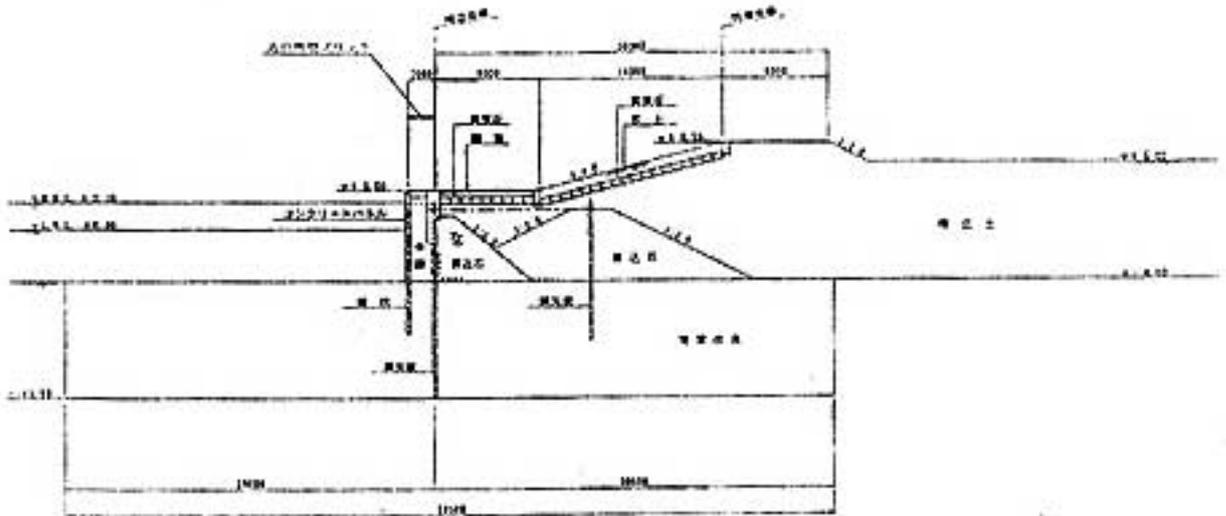


図-2.2.5(1) 直立型護岸の一般構造

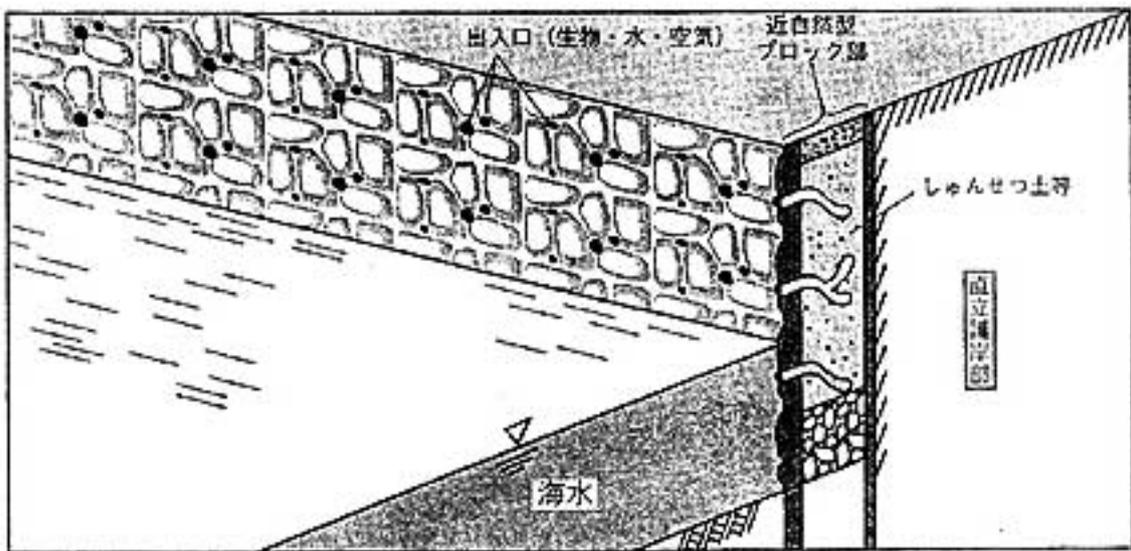


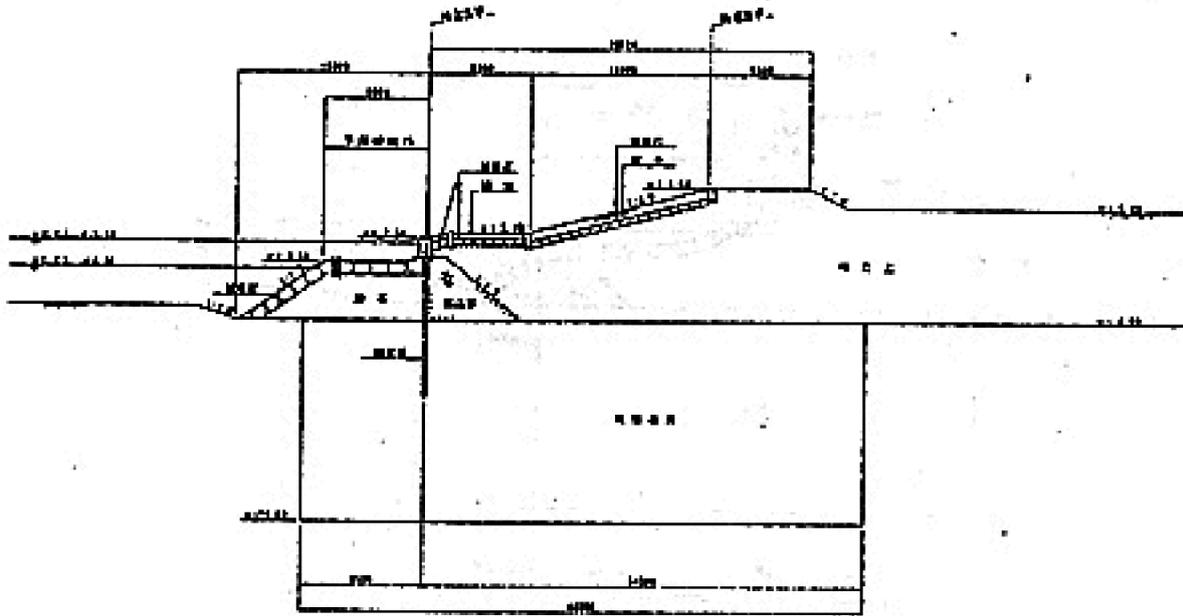
図-2.2.5(2) 近自然型ブロックを備えた直立型護岸のイメージ

注) 近自然型ブロック備えた直立護岸の詳細な形状等については今後検討していく。

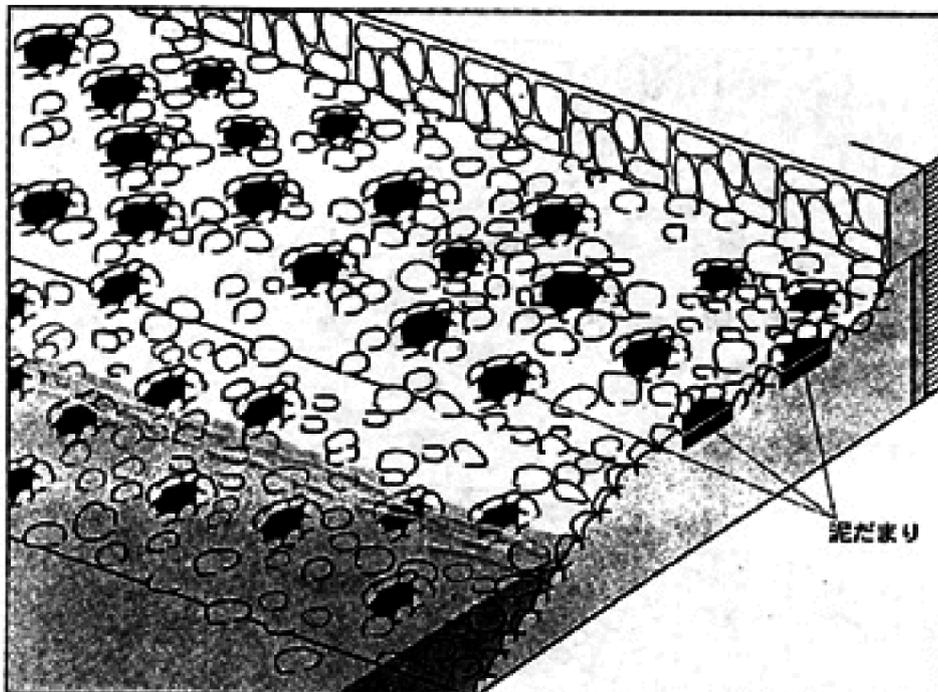
●干潟機能を持った緩傾斜型護岸

緩傾斜型護岸の潮間帯部に干潟機能を持たせることにより、底生生物、付着生物及び魚類の生育環境の創出に配慮する。また、夏季の貧酸素状態からの水生生物の避難所的な浅場を確保する。

構造としては、泥だまりにしゅんせつ上等を入れることにより、底生生物の生育環境の創出に配慮し、潮間帯部の斜度を緩くしてやることにより底泥の流出を防ぐ構造とする。また、潮が引いた状態では一部干出する構造とし、干潟を利用する鳥類の生息環境の創出に配慮する、。



図一2.2.6 (1) 緩傾斜型護岸の一般構造



注) 干潟機能を持った緩傾斜護岸の詳細な形状等については今後検討していく。

図一2.2.6 (2) 干潟機能を持った緩傾斜型護岸のイメージ

●干潟機能を持った汐入

機能的には、干潟機能を持った緩傾斜型護岸と同様であるが、直立型護岸部等に配置することにより、単一な環境となりやすい護岸前面に変化を持たせる。

構造としては、幅15～30m、奥行き15m程度の汐入部を設け、その底面の形状に変化をつけることにより、日陰や汐だまりを伴った多様な生育環境の創出に配慮する。

なお、干潟機能を持った緩傾斜型護岸と同じく泥だまりを設け、しゅんせつ土等を入れることにより、底生生物の生育環境の創出に配慮する。

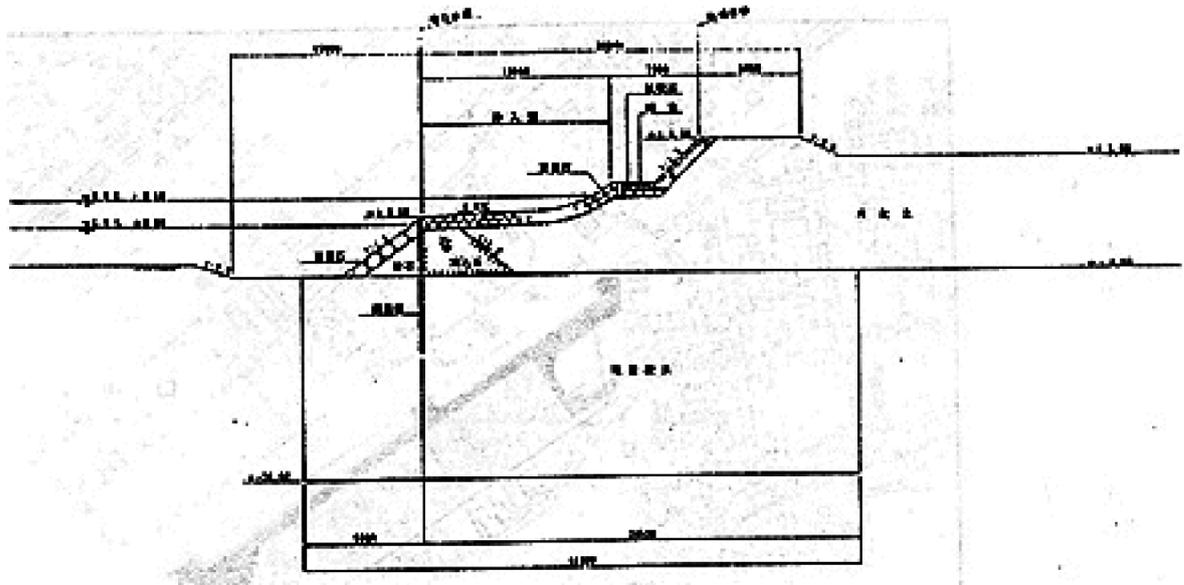
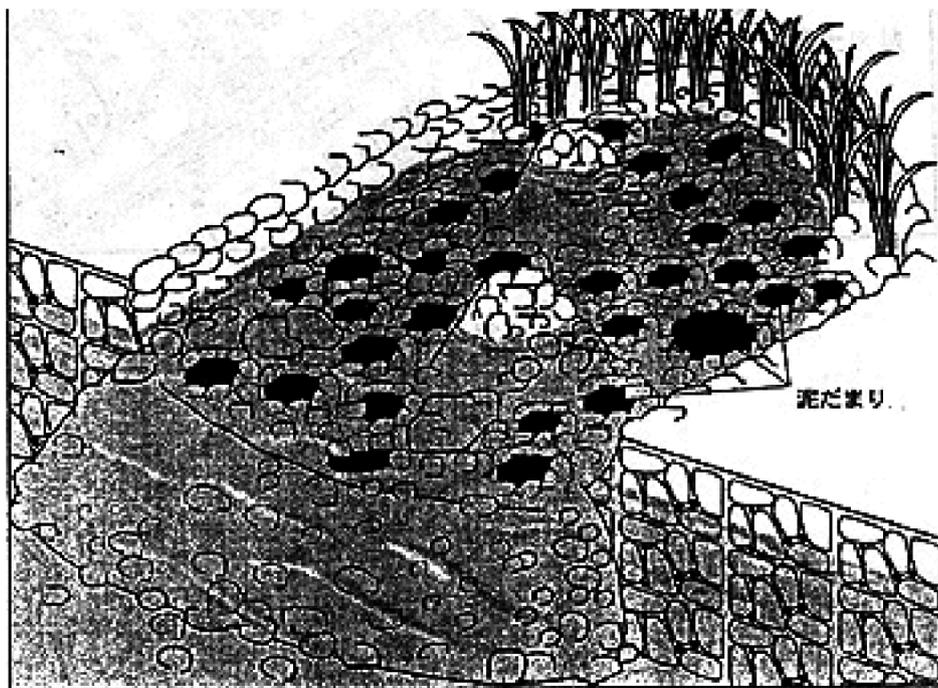


図-2.2.7 (1) 汐入部の一般構造。



注) 干潟機能を持った汐入部の詳細な形状等については今後検討していく。

図-2.2.7 (2) 干潟機能を持った汐入部のイメージ